

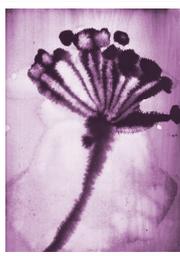
## Ross Bleckner 画集“CEREMONY”より



オリジナル



グレイスケール



紫



緑



黄



橙

ヴァリエント

“Ross Bleckner”<sup>注)</sup>

この作品は絵かな？写真かな？それともコンピュータ・グラフィックスかな？

この画集では左頁に写真、右頁に作品が並べてあるね。右頁の作品は左頁の写真と何となく似ているものが多いよ。だから多分右頁はそれらの写真を基にした絵かコンピュータ・グラフィックスだろうね。写真と全然似ていない作品は抽象画のように見えるよ。でも上の作品は何かの植物を基にしていることが形からわかる。茎の先から放射状に広がって花をつけるアガパンサスじゃないかな。真中にある丸い子房から上向きに伸びているたくさんの線の先つちよには丸い花がついているよ。子房から下の茎には細かい産毛のような線がいっぱい描いてあるね。左右に広がって重い上部を1本の茎が弓なりになって支えているんだね。

この作品は、藍色のような暗い青色だけでできているね。花は逆光に照らされて暗くはっきりした部分もあるけれど、端の方では色が薄くなって白い光を透しているみたいだね。白い光は外側の青暗い世界に取り囲まれているような気がしない？画面がもっと大きかったら、白い光の周りはきつともっと暗いと思うんだ。暗い藍の世界の中でたった一本の明るい光が向こうから飛び込んできて、一つの花を照らしだし、その花の影を絵を見ている人に届けてくれているように感じない？

これを創った人はなぜ藍色しか使わなかったのかな？そう、もしも花が赤かったり、茎が黄緑だったりすると光が向こうからやってくる感じが弱くなってしまふよね。藍色だけで他の色がないから不思議な感じがするんだよね。これ一体何かな？て考えたりするんだよね。

藍色以外の色だったらどんな感じがするかな？と思ってヴァリエントを創ってみたよ。どのヴァリエントも1色で創ってみたけれど、藍色がやっぱり一番胸にキュンとくるね。色って心に働きかけるんだね。

白い光もおもしろいね。汚れのように見えるところがあるけれど、汚れじゃないよ。ためしに今ここにある画用紙に水を塗って、その上に筆で絵の具を落としてごらん。ほら、絵の具が水の上にだんだんしみ出していくでしょ。水の多いところはだんだん薄くなってどんどん広がっていくね。今度は絵の具が半分乾いたところのそばにもう一度同じようにやってみようか。あれあれっ、線を描いていないのに境目に線ができたよ。凸凹と曲がりくねったおもしろい線だね。

あっ今、この瞬間に「この絵は水彩画だ」って閃いたでしょ。絵描きさんは細い筆で何本もの産毛を描いたり絵の具をたらし込んだりしながら絵を描いていったんだね。「ステイニング」っていう方法なんだって。

この間、法事で行ったお寺の襖絵を覚えてる？墨で描かれた絵だったよね。あの絵も滲んだところがおもしろかったね。あの襖絵を描いたのは昔の日本の絵描きさん。でもこの絵は、1949年にアメリカのニューヨークで生まれた絵描きさんが描いたんだよ。君が生まれた頃に描かれた絵かもしれないね。現代の絵画だね。この絵を見て「光と影がすごいな」って思って調べたら、やっぱりこの絵描きさんは光が大好きなんだって。闇の中で光が当たって揺れているようなものをいくつも並べてみたり、光の当たり方で違って見える色のついたものを並べてみたり、不思議な感じのする絵をたくさん描いているよ。

絵を見ているといろいろなことを思い出さない？草がいっぱい生えている原っぱで見たきれいな夕陽とか、そのとき一緒にいた人の声とか、話したこととかね。見る人の心の中にそれぞれのイメージを呼び起こすことをねらっているのかもしれないね。心の中でいろんな音や思いが響き合ってくるような感じだね。

注) “ROSS BLECKNER” ArT RANDOM 37, 1990, 京都書院、全作品についてタイトルや解説、頁数の記載がない。

